

## 慶應義塾大学医学部消化器内科

慶應義塾大学医学部は1873（明治6）年創設の「慶應義塾医学所」を経て1920（大正9）年に私学で最初の大学医学部として誕生いたしました。福澤諭吉の「実学の精神」、「独立自主」、「半学半教」の精神に加えて、北里柴三郎初代医学部長が医学部創立に際し述べた「基礎・臨床一体型医学・医療の実現」を理念としております。消化器内科ではこのような理念を実践し、教室員全員で診療、研究、教育に力を注いでおり、ポピュラーな疾患から高度先進医療まで消化器疾患全般にわたり、臨床力・研究力を高めてまいりました。1963年に故三辺謙教授が初代の主任教授に着任し開講され、故土屋正春教授、石井裕正教授、そして現在の日比紀文教授へと引き継がれてまいりました。この間、一貫して上記の理念を継承し、その時代における最先端の治療を提供すべく、臨床、研究に邁進してまいりました。

消化器臓器には極めて複雑な生理機能が備わっており、消化吸収、消化管運動、腸管免疫、代謝調節など、食道から大腸に至るまでの消化管と肝胆膵との連携により巧みなバランスが保たれております。これらの異常・疾患は、全身他臓器へも影響を与え、複雑な病態を呈してきます。炎症性疾患、免疫異常、機能異常、腫瘍性疾患など、すべての病態に対しての深い理解と経験が求められます。中でも上部消化管の機能性疾患、炎症性腸疾患、悪性腫瘍、さらに肝胆膵における免疫・機能調節異常は、日比教授が就任されてから特に力を入れてきた分野であります。疾病治療に際しては、内視鏡医学、超音波医学、放射線医学などを駆使して、適切な病態解析とそれに対する制御を目指すことが、われわれ消化器内科医の使命であります。

がん診療に際しては、「標準治療の実践」と「個々

の症例に対する応用的治療」を基本的な理念として、診療・研究に従事してまいりました。また、各診療科の協力のもと、2009年より腫瘍センターが正式に発足（旧包括先進医療センターを引き継ぐ形で発足）し、現在、院内全体における外来化学療法 of 統括を行っております。内視鏡センターにおいては、カプセル内視鏡、小腸内視鏡の導入により診断技術が向上し、さらに、内視鏡的粘膜切除（EMR）、内視鏡的粘膜下切開剥離術（ESD）も年々症例数が増加しております。肝胆膵領域においても、超音波誘導下あるいは血管内治療（肝細胞癌に対するRFA、PEIT、TACE）は東京都内でも有数の症例数を誇っており、膵胆道系腫瘍に対する内視鏡的診断・治療（超音波内視鏡下生検、胆道ドレナージなど）に関しても、近年症例数が急増しております。

教育に関しては、平成19年度より南関東圏における8大学12研究科により申請・採択された、文部科学省「がんプロフェッショナル養成プラン」に基づき、各種教育プログラムの実施、研修会の開催、教育セミナーの開催など、幅広い活動を行っております。がん薬物療法専門医は、日本臨床腫瘍学会により現在全国で451名認定されておりますが、当科からも3名の専門医を輩出しており、臨床、研究、教育に幅広く活躍しております。

臨床医学の教室としてのわれわれ慶應大学消化器内科の使命は、「優れた素養・技術を身につけた医師の養成を図り、患者さんの診療に全力を尽くし、未だ解決を見ない医学の諸問題に対して果敢にチャレンジしていくこと」であると認識しています。今後もこの方針に基づいて、教室員一丸となって医療の前進に貢献していきたいと考えています。